「推し活」

—2稿—

2024/8/9

雨森 れに

〈人物表〉

飯塚　麗　（17）　レイにハマっている高校生

五十嵐　芳樹　（30）　レイの中の人。接客のいい書店員

レイ　（20）　芳樹が演じるVチューバー。イメージカラーは紫

〈ログライン〉

レイの中身に気付いた麗が、レイを口実に芳樹と関わろうとする。

〈ねらい〉

テーマ触媒：はじまり

恋のきっかけとはじまりを描く

1.

麗の部屋（朝）

紫で統一された子供部屋。机の上に大きなパソコンモニター。

制服姿の飯塚麗（17）が配信を見ている。映っているのはVチューバーのレイ（20）。

レイ　「俺が1番偉いんだから、俺の言う事聞いてりゃいいんだよ！」

麗、意味ありげな笑みを浮かべる。

2.

書店・外（夜）

ビル1階にある書店。ガラス張りで店内が見える。

麗、書店へ入っていく。

3.

書店・中・レジカウンター（夜）

レジカウンター内。誰も並んでおらず、雑談する五十嵐芳樹（30）と店員A。

店員A　「五十嵐さん、接客コンテスト1位だったんですね！」

芳樹　「（照れくさそうに）まぐれですよ。なんか名札も変わるみたいで」

店員A　「名札変わったら自慢したほうがいいですよ。こうやって」

店員A、自分の胸にある名札をつまみ、突き出すようにする。

芳樹、耐えきれず吹き出す。

芳樹　「主張のクセが強いよ」

麗、不機嫌そうにカウンターへ。

麗　「すみません。これ探してるんですけど」

芳樹　「『Vチューバーになる10の方法』ですか。案内しますね」

カウンターから出てくる芳樹。

麗、芳樹に耳打ちする。

麗　「Vチューバーのレイさんが教えてくれてもいいよ」

芳樹　「はい？」

麗　「実際やってる人のほうが詳しいじゃん？　レ・イ・さん」

芳樹　「どういうことですか」

麗　「レイって私と同じ名前でさ。最近推してるの」
カウンター内の店員A、二人を不思議そうに見る。
芳樹、店員Aの様子に気付く。
芳樹　「あぁ、そういう方がいるんですね。推し活、いいと思います。じゃ、こちらへどうぞ」
芳樹、早足で歩き出す。
麗　「（楽しげに）ね、あなたがレイでしょ。接客コンテスト1位なんだ？　配信では俺様なのに」
芳樹の後ろを歩く麗。
芳樹は焦った表情。

4.

書店・中・通路（夜）

棚差しの本棚が並ぶ通路。
本を探す芳樹。
麗は笑顔で眺める。
芳樹、本を渡しながら、
芳樹　「これですね」
麗　「なんでバレたのかとか聞かないんだ」
芳樹　「えっと、ちょっと言ってる意味が……」
麗　「優等生みたいな顔してさ」
麗、スマホを見せる。画面には昨日の配信アーカイブ。
レイの声「俺が1番偉いんだから、俺の言う事聞いてりゃいいんだよ！」
麗　「実はけっこうモラ気質？　もう1回流そっか？　聞く？」
芳樹、怒りを込めて睨む。
芳樹　「他のお客様のご迷惑になりますのでご遠慮ください」
麗　「やば。めっちゃいい、その顔。（本を受け取って）ね、今日、ここ何時まで？」
芳樹　「そういうの困るんで」
麗、腕時計を見る。
麗　「いつも通りならあと1時間ってとこかな」
芳樹、目を見開く。
麗、笑顔で芳樹に本を返す。

芳樹　「ちょ、ちょっと！」
麗　「三角公園で待ってるね」
麗、手を振って立ち去る。
芳樹、返された本を見る。悔しそうな表情。

5.

三角公園（夜）

こぢんまりとした公園。
麗はブランコでスマホを触る。
芳樹、不機嫌そうに近づく。
芳樹　「お客さん、なんで俺の勤務時間知ってんの」
麗　「（笑顔で）わたし、麗。麗って呼んでよ」
芳樹　「名前なんかどうでもいいし」
麗、残念そうな表情。
芳樹　「いいから。早く教えて」
麗　「そうやって喋ると他の人にもレイってバレちゃうよ」
芳樹、ブランコのフレームを殴る。
麗　「うわっ」
芳樹　「それも、なんでわかったわけ？」
麗　「喋り方が違うだけでおんなじ声じゃん」
芳樹、眉間に皺を寄せる。
芳樹　「それだけで？」
麗　「推しの声間違えないし。気づいたとき神様の存在信じたもん」
芳樹　「いくらなんでもそれで気付くっておかしいでしょ」
麗　「配信と本屋。毎日聞き比べてたらわかっちゃうんだなぁ」
驚いたように目を見開く芳樹。
芳樹　「だから気付いたんだ……勤務時間もそれでか……」
麗、満足げな表情。
芳樹　「言うんでしょ。こんな冴えない奴がレイやってましたってさ」
麗、バツが悪そうに、
麗　「誰にも言わないよ。ただ浮かれちゃっただけ」
麗、ブランコから降りる。
麗　「ホントはレイかどうかなんて、どうでもいいんだ」

芳樹　「（警戒するように）え？」
麗　「五十嵐さんと話してみたかったの」
麗、芳樹に近づく。
麗　「はじまりはレイだったけど」
麗、芳樹に顔を寄せて、
麗　「リアルの五十嵐さんが好きなの」
芳樹　「意味わかんないから！」
芳樹、麗を押して距離を取る。
麗　「私も意味わかんない！　でもそういうとこも好き！」
麗、声をあげて笑う。
麗　「もうすぐ10時だし。明日も話そうよ。待ってるね。約束！」
麗、手を振って立ち去る。
芳樹、呆然と立ち尽くす。

6. 書店・中・カウンター（夜）

麗　「五十嵐さんっていますか？」
店員A　「五十嵐は先ほど退勤致しまして……よろしければ代わりにお伺いします」
麗　「五十嵐さんじゃないとダメなんで」
麗、慌てるように書店から出ていく。

7. 公園・中（夜）

ブランコに乗っている芳樹。
麗、芳樹を見て表情を緩める。
麗　「早いね」
芳樹　「来ないとバラされるかもだし」
麗　「誰にも言わないって。ふたりだけの秘密！」
芳樹　「信じていいってこと？」
麗、頷く。
芳樹　「わかった。俺も約束守ったから、そっちも頼むよ」
芳樹、去ろうとする。
麗　「言わないから、ひとつお願い聞いてよ」
芳樹、ため息をついて、

芳樹　「なに」

麗　「友達からでいいから仲良くしてほしいの。ホントは付き合いたいけど」

芳樹　「やだよ。正直、気持ち悪いもん」

麗、ショックを受けて泣きだす。

麗　「なんでそういう事言うのっ」

芳樹　「友達になる以外ならいいよ」

麗　「……古い名札ちょうだい」

芳樹　「なんでそんなことも知ってんの……まぁべつにそれぐらいなら……」

芳樹、鞄から名札を取り出す。

芳樹　「悪用厳禁で」

麗、名札を受け取る。

麗　「（挑むように）私、絶対諦めないから！」

芳樹、手を振って立ち去る。

麗、悔しそうな表情。

おわり